『金瓶梅詞話』における「茶を淹れる動作」

荒木　典子

要旨『金瓶梅詞話』の「茶を淹れる」動作（抽出する動作）を表す動詞には、“點”を筆頭に複数の種類が存在する。劉 2002 はその理由を、本書に「宋人茶」と「明人茶」の特徴が混在しているためだとする。これらの動詞は作品内での分布や文法的ふるまいに偏りがある。字義通りの動作を表すならば、淹れ方の違いに応じて使い分けられているからだと言えるが、原因はむしろ本書の成立事情にある。本論文では主に“點”、“頓”の用例について、表される動作が抽象的な「活動」なのか具体的な「事件」なのか（沈 1995、石・李 2004）、共起する語法成分を参考に検討し、本書にみられる語彙の歴史的変化の痕跡を明らかにする。

キーワード　金瓶梅詞話　茶を淹れる動作　内部差異　有界　無界

1. はじめに

明代萬暦 45(1617)年の序を持つ『金瓶梅詞話』には、飲食の描写が非常に多いことが知られている。喫茶の描写も多い。[1]喫茶の場面において「茶を淹れる（抽出する）動作」を表す動詞には以下のものが見られる。（　）内は用例数である。[2]

點(33),頓(28),煮(5),泡(3),燒(3),烹(4)

2. “點”

用例数：33

用例の見られる章回：

2,3,4,6,11,37,39,43,50,51,52,54,72,73,74,75,79,81,85,86,87,89,99

2.1 “點”が表す茶の抽出の動作

劉学忠 1999:77 で、時代ごとの“烹法”（茶の淹れ方）を以下のように紹介している。

唐代煎茶、宋代点茶、明代泡茶、这是古代茶在烹法上的三个基本阶段。[3]

---

[1] 有人曾做过统计,《金瓶梅》中提到茶的多达 629 处,这在古典文学作品中可谓空前的现象,可见饮茶之普遍。（郭孟良 2002:129）

[2] 収集した用例は“茶”を目的語に取るものに限るが、目的語は動詞に後置されるとは限らない。動詞に前置、あるいは、これらの動詞が含まれる文よりもっと前の部分で提起される場合も用例数に含めた。

[3] “點茶”以外の淹れ方は以下の通り。“煎茶”は、加工した茶葉を固めた餅茶、団茶を、飲むときに削って粉末にして煎じる（陳 1998:42）、“泡茶”は“散叶茶”（固めていない茶葉。リーフ・ティー）に熱湯を注ぐ（陳 1998:42、王・呉・呉 2009:22）。

『金瓶梅詞話』の成書年代は明代だが、舞台は宋代であるため、「宋人茶」「明人茶」の特徴が混在している（劉 2002:37）ため、茶を抽出する動作として“點”が見られる。とはいえ、方法まで宋代と同じだろうか。

劉 2002:38 によれば、“點”は粉末にした茶葉を湯呑みに入れてから熱湯を注ぎ、“擊拂”「擊払」する動作だという。布目 1989:213 は、これを以下のように説明している。

> 唐末のころの人、蘇廙（そい）の『十六湯品』には、「湯を注ぐ」ことが見えるから、唐末には茶碗に湯を注いで、茶を点てることが始まっていたらしい。茶末（筆者注：固形茶をすって粉にしたもの）の量は一銭（約三・七グラム）、これを茶匙ですくっていれ、ちょっと湯をいれて、むらのないように掻きまぜ、また湯を入れ、かきまわして「擊払（げきふつ）」する。擊払は強くかき廻すことである。まだこの時には茶筅はないので、匙で擊払する。

茶葉の形態および抽出方法は時代によって異なる。明代には、固形茶よりも葉の形を保持した茶葉が主流になり[4]、抽出方法は熱湯を注ぐ方法が主となった。[5]そのため『金瓶梅詞典』（中華書局,1991 年）では“點茶”を以下のように定義している。（例文は省略）

> ①本为烹茶。这里指沏茶;泡茶。点，烹茶方法。②拿点心配茶。[6]
> （①本来は“烹茶”である。ここでは“沏茶”、“泡茶”［茶葉に熱湯をかけ茶を淹れる］を指す。“点”は茶を淹れる方法。②菓子を茶請けにする。）

『近代漢語詞典』（団結出版社、1997 年）でも“冲茶，泡茶。”とする。つまり『金瓶梅詞話』の“點茶”は、宋代の「擊払」をする抽出方法ではないと解釈されている。

2.2 “點”の用例の分類と分布

33 例の用例すべてにおいて、“點”は述語動詞として用いられている。“點”を用いた述語フレーズを、単純な動賓構造(VO)と、動詞あるいは目的語に付加成分が付く形式の二つに分けてみたところ、形式と作品内における分布に相関関係が見られた。

まず、用例の分類を示す。

A.単純な動賓構造(VO)　10 例

1)迎春打掃房裡,抹淨桌椅,燒香**點**茶。(54/11b-6)[7]

---

[4] 尤も、布目 1989:206 によれば、宋代には既に片茶（固形茶、ケーク・ティー）散茶（葉茶、リーフ・ティー）の二大別が存在していた。なお、明代にリーフ・ティーに熱湯をかける抽出方法が盛んになった理由は、明の太祖洪武帝だったらしい。洪武帝は茶どころの出身であるため、農民が手間のかかる餅茶、団茶の製造に苦労していることを理解し、洪武 24 年、宮廷に献上する龍団（団茶の表面に龍の図案をあしらったもの）の製造を停止し、若芽で作った茶を献じるように命令を出した。（王・呉・呉 2009:22、布目 1989:236）

[5] 注 3 を参照。

[6] ②が茶を抽出する動作から派生したものかどうかは待考。

[7] 巻数、葉数、表裏、行数を表す。

（迎春は部屋を掃除しテーブルや椅子をきれいに拭き、香を焚いて茶を淹れた。）

2)連忙教春梅**點**茶與他吃。(72/10b-7)

（急いで春梅に茶を淹れさせ彼[西門慶]に飲ませた。）

10 例中 2 例は「茶請けの菓子を出す」意味である。

3)每人兩盒細茶食來**點**茶。(39/9b-10)

（各人に二箱ずつ上等の茶菓子を茶請けとして出した。）

B.A 以外のものはすべてこちらに分類した。下位分類は以下の通りである。

B-1.動詞に、数量詞の付いた目的語“茶”が後置する。(V+num+“茶”)　3 例

4)不多時,便濃濃**點**兩盞稠茶放在桌子上。(2/10a-1)

（ほどなくして二杯の濃い茶をテーブルの上に置いた。）

目的語“茶”に更に修飾語が付く例もこのグループに入れた。

5)那婆子…便濃濃**點**一盞胡桃松子泡茶,與婦人吃了。(3/6a-8)

（王婆は...すぐに濃く淹れた一杯の胡桃と松の実の入った「泡茶」[8]を淹れ、潘金蓮と飲んだ。）

B-2.B-1 に、単純方向補語“來”[9]が後置する。(V+num+“茶”+“來”)　4 例

6)乾娘,**點**兩杯茶來我吃。(2/9b-11)

（おばさん、お茶を一、二杯淹れてきてくれ、飲みたい。）

7)那婆子隨即**點**盞茶來,兩個吃了。(3/7b-5)

（王婆はすぐに茶を一杯入れてきて、二人で飲んだ。）

B-3.動詞に、目的語“茶”、単純方向補語“來”が後置する。(V+“茶”+“來”)　8 例

8)連忙**點**茶來吃了。(4/3b-5)

（[王婆は］急いで茶を淹れてきて［西門慶に］飲ませた。）

9)玉簫**點**茶來吃。(43/1a-11)

（玉簫が茶を淹れてきて［西門慶に］飲ませた。）

B-4.動詞に、“了”と目的語“茶”が後置する。(V+“了”+“茶”)　1 例

10)虔婆…一面**點**了茶,一面下去打抹舂檯,收拾酒菜。(11/10a-3)

（やり手婆は…お茶を淹れたり、下がって机を拭き酒肴を整えたりした。）

B-5.B-4 の目的語“茶”に更に数量詞が付いている。(V+“了”+num+“茶”)　3 例

11)那婦人便濃濃**點**了一盞茶,遞與他。(37/6b-2)

（潘金蓮はすぐに濃い茶を一杯淹れ西門慶に飲ませた。）

目的語“茶”に修飾語が付く例もこのグループに入れた。

12)婦人…又濃**點**了一盞瓜仁泡茶,雙手遞與武松吃了。(87/6b-10)

（潘金蓮は…また一杯の濃いスイカの種の入った「泡茶」を淹れた。両手で武松に渡して飲ませた。）

B-6.B-4 に、単純方向補語“來”が後置する。(V+“了”+“茶”+“來”)　1 例

13)那春梅真個**點**了茶來。(51/13a-10)

（春梅は本当に茶を淹れて持ってきた。）

B-7.動詞に、目的語“茶”、複合方向補語が後置する。(V+“茶”+C_1+C_2)　1 例

14)王六兒**點**茶上來。(99/1b-10)

（王六児が茶を淹れて来た。）

---

[8] 名詞用法。茶の種類。後述。

[9] 方向補語ではなく連動文ととらえたほうがふさわしそうな例文もあるが、判断の基準が定まらず「V（+α）+“茶”+“來”」の“來”はすべて動詞の方向補語とした。

B-8.動詞に後置した複合方向補語の間に目的語“茶”が割って入る。($V+C_1$+“茶”+C_2)　1 例
15)長老連忙**點**上茶來。(89/7a-10)
（長老は急ぎ、茶を淹れてきた。）
B-9.動詞に、複合方向補語が後置する。($V+C_1+C_2$)　1 例
16)這春梅連忙舀了一小銚子[10]水坐在火上,使他撾了些炭在火內,須臾就是茶湯。滌盞乾淨,濃濃的**點**上去,遞與婦人。(73/17b-8)
（春梅は急いで湯沸かしに汲んだ水を火にかけた。彼女［秋菊］に炭を持って来させて火にくべさせ、しばらくすると湯が沸いた。湯呑みをきれいに洗い、［茶を］濃く淹れ、女［潘金蓮］に手渡した。）

A(10 例),B(23 例)それぞれの用例が、作品内においてどのように分布していたかを説明する前に、この作品そのものの構成に触れておきたい。『金瓶梅詞話』はその成立事情から、全体を少なくとも三つに分けることができる。そして、その三つの部分は少しずつ違う時期の言語を反映している。

I.第 1～6 回:『水滸伝』武松故事に由来する部分。底本となった版本は未確定だが、物語の都合上少し設定を変えていることが明らかになっている。
II.第 53～57 回:沈徳符『萬暦野獲編』の記述から、この部分は早い時期に失われ、現在見られるのは後から別人が補作したものとされる。ほかの部分と比べると語彙や文法に違いがあるという指摘が数多くある。[11]
III.以上二つを除いた部分:ここもさらに細かく分けられるという説もある。[12]

単純に成立時期で並べるとI＞III＞IIになる。これらは合わせて刊行される時に全体を見直し、整えた可能性は当然あるが、先行研究において文法や語彙の不統一性が指摘され、それはしばしば三つの箇所の基礎方言の違いや成立のタイムラグと関連付けられる。[13]今回は試みに、先ほどの A,B の用例が、この三つの箇所のどこに多く表れるかを表 1 にまとめてみた。

表 1

	A	B	計
I	0	9	9
II	1	0	1
III	9	14	23

10 “銚”は、原文では旁が異なる。排印本により改めた。“子”も原文では“了”であるが排印本により改めた。“銚”は湯沸かし器のこと（布目 1989:244）、これに接尾辞“子”がついたものであろう。
11 朱徳熙 1985、荒木 2007 ほか。
12 地蔵堂 1993。
13 例えば伊原 1994 では、『水滸伝』由来の冒頭部（第 1~6 回）と補われた中央部（第 53~57 回）を南方系の言語（あるいは南方系作品の文体）を反映する部分、そうでない部分を、北方語を反映する部分と考え、いくつかの語彙・語法の偏在を示し、南北の言語の特徴、新旧言語の差異がその要因であると述べている。

33 例中 9 例、三分の一弱が、6 回分しかないIにある。かつ、すべて B の用例である。用例が多いのは、主に茶店で物語が進むからであるが、抽出を表すのはすべて“點”で、後で述べる別の動詞が出てこない。Ⅱは 1 例のみ、A の用例である。ⅢもBの方が多いが、Ⅰでは 0 例だった A の用例が見られる。

続いて、単純な動賓構造の A、動詞や目的語に付加成分を伴う B の形式上の違いが意味するところを考えるために、沈 1995 の概要を示す。

・人間の認知には「有界」と「無界」の対立がある
・名詞の「有界」とは、一定の空間を占め、一定の境界を持つ個体であること、動詞の「有界」とは、時間軸において起点と終点があること。
・現代漢語ではそれが文法的手段によって表示される。有界化を示すマーカーが存在する。名詞のマーカーは、数量詞、指示代名詞、または名詞自体が固有名詞であること、動詞のマーカーは、間接目的語、結果補語、方向補語、完成・実現の“了”。
・有界化された動作を「事件」(event)、されていない動作を「活動」(activity)と呼ぶ。
・動詞と目的語を組み合わせる場合、動詞が有界化されていれば目的語となる名詞も有界化されていないと文終止ができない。
・動詞にマーカーがなくても名詞が有界化されていればそれは「事件」である。（形容詞＋名詞の組み合わせにも「有界」「無界」の概念が影響するがここでは省略する）

石・李 2001:158-166 では、宋元以降、述語動詞に構造の変化が生じたことがきっかけで、およそ 15 世紀ごろには新しく、アスペクトマーカー、量詞、結果補語という三大文法範疇が誕生し、現代漢語の有界性成分が持つ文終止への機能へと発達していったとする。これら三大文法範疇は沈 1995 で動詞の有界化のマーカーとするものである。

『金瓶梅詞話』は 17 世紀初めには成立していたと考えられ、アスペクトマーカー、量詞、結果補語という三大文法範疇がふんだんに見られる。しかし、有界、無界の概念の表出が現代と全く同じであるかと言うとそれほど厳密とはいえない。動詞が有界化されていたら目的語となる名詞も必ず有界化されていないといけない、さもないと文終止ができない、とは必ずしもいえないからである。動賓構造ではないが、関連する例を挙げる。「物に働きかけ結果としてどこかに置く」ことを表すのに、現代漢語では普通、処置式を使うことが多いが、「V＋O＋“在”＋場所」という形式を用いることもある。ただし、目的語となる名詞が不定でかつ数量詞をともなうという条件が必要である。例文で示すと以下のようになる。

*写名字在上头
*写这个名字在上头
写一个名字在上头

この形式の成否も動作の有界性と関係がある。「“在”＋場所」は、動作の終点を示す（そこへ到達すればこの動作は終了する）、つまり有界化されている。だから動詞の目的語である名詞も有界化されていなければならない（定、不定

の問題は今回除外する)。「V＋O＋“在”＋場所」は『金瓶梅詞話』に 88 例あり[14]、うち 39 例が裸名詞である。目的語となる名詞は有界性を持たなければならない、という制限はないのだ。[15]

今回の“點”の例の中でも、動詞には“了”や方向補語が後置しているのに“茶”は裸名詞、という例が複数ある。それで文終止しているかどうかは、白話小説の文体は切れ目がわかりにくいため判別がしにくいことも多いが、少なくとも動詞が有界化したらその目的語の名詞も必ず有界化しなくてはならない、というほど厳しいルールは『金瓶梅詞話』にはないようだ。

以上を踏まえて先ほどの“點”の用例の分類を見てみると、グループ A は動詞も目的語となる名詞も有界化していない(「活動」を表す)、グループ B は動詞と目的語となる名詞の両方あるいはどちらかが有界化している(「事件」を表す)。言い換えれば A で表される「茶を淹れる」は抽象的、概念的なものである。例えるならば日本語の「お茶くみ」である。対して B は具体的な個別のできごとを表す。[16]このことを表 1 に書き足したのが以下の表 1 'である。

表 1 '

	A(無界)	B(有界)	計
I	0	9	9
II	1	0	1
III	9	14	23

“點”は I において専ら「事件」すなわち個別の「茶を淹れる」ことを表すのに用いられる。IIには 1 例、一般的な「活動」を二つ並べた“燒香點茶”しかない。この部分については後述する。IIIは、「事件」の用例の方が多いが「活動」も 9 例ある。つまりⅢの言語体系では、“點(茶)”が概念的に用いられることが増えている。IIでは概念的にしか用いられない。宋代の茶について使われていた“點茶”はⅢおよびⅡの体系ではさらに古いものとして位置づけられていたのではないだろうか。

---

14 荒木 2005:245。動作の進行を表す「“在”+場所+V+O」に書き換えられるものや、Vが“有”、“留”などで、兼語式として成立するものを除く。

15 荒木 2005。

16 木村 2014:78 で、無界、有界の形式によって表される動作の抽象、具体の区別を端的に説明している。

> 周知のとおり、動作・行為を表す一般動詞は、辞書形、すなわち無標のかたちでは、個別・具体の動作の言及に適さない。例えば動詞の“扛”がアスペクト助詞の付加もなく、様態表現の修飾も受けずに、無標の形で用いられている(22)の文は、経常的行為として、すなわち、職業として「荷担ぎをしている」ということを述べており、特定の時空間における個別・具体のアクチュアルな動きを語っていはいない。
>
> (22)我爸爸在农场扛麻袋。(お父さんは農場で荷担ぎをしています。)
>
> (中略)
>
> 職業、習慣あるいは習性として繰り返し行われる経常的な行為とは、主体にとっての一種の属性的な存在であり、個別・具体のアクチュアルな存在ではない。つまりは、知識的、概念的な存在であって、知覚的、実体的な存在ではない。(引用ここまで)
>
> 本文で例として挙げた「お茶くみ」は習慣と位置付けられる。

3. “頓”

用例数：28

用例の見られる章回：7,12,22,23,24,29,37,39,46,50,52,73,74,75,91,95

3.1 “頓”が表す茶の抽出の動作

前述の劉 1999:77 では、明代の茶の淹れ方を“泡”で代表しているが、本作品において“點”に次いで多く用いられているのは“頓”である。“頓”は“燉/炖”に通じ、食材などを鍋に入れ火にかけて、あるいは湯煎して、加熱する動作を表す。『金瓶梅詞話』をはじめとする明代の作品でも“飯”、“羹”、“水”などを目的語に取る例が見られる。“茶”の場合、“頓”とはどのような抽出方法を表すのだろうか。明代以降、葉茶に熱湯を注ぐ方法が始まったといわれるが、劉 2002:38 によれば、これと同時に当時流行した方法に“頓,煮,熬,煨”があり、水と茶葉をポットに入れて火にかける方法だという。[17]

3.2 “頓”の用例の分類と分布

28 例のうち、多くが“頓”を述語動詞に用いている。連体修飾語に用いる場合もある。“點”と同様に、単純な動賓構造(VO)と、動詞あるいは目的語に付加成分が付く形式に二分した。連体修飾語の用例は後者に入れてある。

A. 単純な動賓構造(VO)　6 例

17)與他**頓**茶頓水,做鞋腳針指。(23/12a-7)

（彼女［潘金蓮］のために茶を沸かし、湯を沸かし、靴を作り、裁縫をした。）

18)也不搽臉了,也不**頓**茶造飯了。(91/11b-9)

（化粧もせず、茶を淹れたり食事を作ったりもしなくなってしまった。）

概念的な、家事の種類の一つとして、日本語の「お茶くみ」のように使われている。[18]

B.“頓”の後ろ、あるいは目的語“茶”の前に何らかの成分が付くもの　22 例

---

[17] 目的語に“泡茶”［名詞］を取る場合もある。この時も煮出しているのだろうか。

今日茶是誰**頓**的? (24/10b-1)（今日のお茶は誰が淹れたんだ。）

この“茶”は文脈から“泡茶”とわかる。“泡茶”とは茶湯の中に香料や果実などをいれた飲み物の名称である。（劉 2002:36）。郭孟良 2002:131 では“大多为香花、果仁、芝麻、盐、姜等物入茶沸水冲泡而饮。”（多くの場合、香りのする花や果物のさね、ごま、塩、生姜などを茶葉と一緒にし、沸騰した湯を注いで飲む）とし、『近代漢語詞典』（上海教育出版社、2015）では“用花朵、药材冲泡制成饮品；也指用干果、蜜饯等与茶叶一起沏泡。”（花や薬材に湯を注いで作る飲み物、また、ドライフルーツ、果物の砂糖漬けと茶葉を一緒にして湯を注いだものも指す）としている。『近代漢語詞典』（団結出版社、1997）では“用茶葉或乾果等沏的茶。區別於白開水。”（茶葉、或いはドライフルーツに湯を注いで淹れた茶。白湯と区別される）とする。名称に“泡”とあるからには沸騰した湯を注ぐもので煮出すものではないように思われる。そうであるならば“頓”は「水と茶葉を火にかけて煮出す」ではなく「湯を沸かし、それを茶葉などに注ぐ」動作を表す場合もあるのではないか。日本語の「茶を沸かす」も同様な含意を持つ。麦茶などは実際に水と一緒に麦を煮出すが、煎茶などなら水のみを先に沸す。尤も、李佳瑜 2021:87-88 では“泡茶”を、茶葉とその他のものを煮出して作ると考えている。

[18] 尤も、次の例のようにその場の状況が説明されると個別の事件に感じられる。

旋戳開爐子**頓**茶。(24・5a-9)（すぐに炉に火をおこし、茶を淹れた。）

“點”の用例よりも付加成分のバリエーションが豊富で、分類すると煩雑になるので細かい下位分類は省略する。

“頓”に“了”や補語のつくもの

19)分付玉簫**頓**下好茶。(74/11a-10)

（玉簫に言いつけ、いいお茶を淹れさせようとした。）

“茶”に数量詞や定語がつくもの

20)今日**頓**這様茶去與人吃。(24/9b-2)

（今日はこんな茶を淹れて人に飲ませてしまった）

そのほか、以下のようなものも入れてある。

21)是竈上**頓**的茶。(24/9b-2)

（台所で淹れた茶です。）

強調構文にも連体修飾語にも解釈できる。

22)你**頓**的茶不好。(24/10a-4) 連体修飾語

（お前の淹れた茶がまずい。）

様態補語を伴っている。

23)多著些茶葉,**頓**的苦艷艷我吃。(73/17a-6) 様態補語を取る

（茶葉を多めに、苦くして私に飲ませなさい。）

“點”と同様に、これらの用例が作品中の三つの箇所のどこに表れるか、有界・無界の区別も併せて表２にまとめた。

表２

	A(無界)	B（有界）	計
Ⅰ	0	0	0
Ⅱ	0	0	0
Ⅲ	6	22	28

茶の抽出を意味する“頓”はⅢにのみ現れ、「事件」を表す用例が多い。ⅠとⅡでは、茶の抽出の動作を表すのに“頓”を使わない。[19]伊原 1994:186 では、（本発表でいう）ⅠとⅡの部分に共通して認められる要素を、南方系の言語（あるいは南方系作品の文体）において比較的長期間にわたって特徴的に保存され続けた語彙・語法と説明している。茶の抽出を表す“頓”については「使わない」ことが共通要素として認められるのではないだろうか。今回は『金瓶梅詞話』に三段階の時間軸があることを前提にしているが、さらに時間が進んだ先にあると言えるのが詞話本の改訂版とされる崇禎本である。詞話本のIの部分には、“頓”が“茶”を目的語に取る用例はないが“頓羹頓飯”(1/16b-5)ならある。これが、崇禎本の該当箇所では“頓茶頓飯”(2/2b-1) [20]となっている。崇禎本の編者にとって“頓茶”は、抵抗のない言い回しになっていたようだ。

19 『金瓶梅』の元となった底本が未特定なので絶対とは言えないが、中央研究院近代漢語語料庫で『水滸伝』の“頓”を検索したところ、“茶”を目的語に取る用例は見られなかった。

20 崇禎本における巻数、葉数、表裏、行数。

4. 茶の抽出を表すその他の動詞

このほかにも用例は少ないが茶を抽出する動作を表す動詞がいくつか見られる。

4.1 “泡”

用例数:3

現代漢語でも、茶葉に熱湯を注ぐ意味で用いられている。前述の通り明代における主流の抽出方法を表す語彙だが、『金瓶梅詞話』には第 53、54 回に 3 例（付加成分あり 2 例、単純な動賓構造が 1 例）しかない。[21]つまり、IやIIIの部分の言語体系にはない語彙である。

24)大娘來,**泡**一甌子茶在那裏,請坐坐去。(53/2a-5)

（奥さま、こちらへどうぞ。お茶を一杯淹れてありますからどうぞおかけください。）

崇禎本『金瓶梅』ではこの 3 例をすべて削除するが、一方新しい用例を第 15 回に 1 例追加している。

25)須臾**泡**出茶來,桂卿桂姐每人遞了一盞,陪着吃畢,……(15/8b-8)

（茶を持ってきてから桂卿、桂姐がそれぞれ湯呑みを手渡し、付き合って飲み終えた後、……）

第 53、54 回の 3 例が削除されたのは、物語の修正によるものであり、特にこの語を避けたものとは限らない。全く別のところに新たに増やしたということは、崇禎本の編者にとって“泡”を茶の抽出の動作に使うことはおかしなことではなかったのだろう。

4.2 “燒”

用例数:3

“泡”と分布の状況が似ている。現代漢語では、“烧饭”（飯を炊く）、“烧开水”（湯を沸かす）のように用いられる。『金瓶梅詞話』では“茶”を目的語に取るものが第 53 回に 2 例、54 回に 1 例（付加成分あり 2 例、単純な動賓構造が 1 例）見られる。崇禎本では物語の修正に伴い、これらの用例がすべてなくなっている。用例を 1 例だけ挙げる。

26)李瓶兒急攘攘的梳了頭,教迎春慌不迭的**燒**起茶來,點些安息香在房裏。(53/1b-9)

（李瓶児は急いで髪をとかし、迎春をせきたてて茶を沸かさせたり部屋に安息香を焚かせたりした。）

4.3 “煮”

用例数:5

現代漢語では“煮鸡蛋/面条/饺子”（卵/麺/餃子を茹でる）のように用いられる。『金瓶梅詞話』では、第 12 回に 1 例、71 回に 3 例、77 回に 1 例見られる。

27)旋炊火**煮**茶,伐草根喂馬。(71/17b-5)

---

[21] 潘 1999:8 では、詞話本に 30 例近くも現れる名詞“泡茶”について説明してから、詞話本においては茶葉に湯を注ぐ動作を“頓茶”、茶を湯呑みに注ぐ動作を“點”とするのに、この五回（第 53～57 回）の作者は（名詞の）“泡茶”を理解しておらず、湯茶を作る動作動詞だと誤用している、とする。

（すぐに火を起こして茶を沸かし、草を刈って馬に食べさせた。）
28)**煮**出茶來。(71/17b-5)
（茶が沸いた。）
以下の 2 例は四字句の連続の中で用いられている。
29)爐上茶**煮**寶瓶,篆內香焚麝餅。(71/9a-9)
（炉では立派な瓶の中で茶が沸いており、香炉では麝香が焚かれている。）
30)茶**煮**龍團[22],酒斟琥珀。(77/8a-9)
（茶は龍団を煮て酒は琥珀を酌む。）

4.4 “烹”

用例数:4

現代漢語では、「煮る」、「油でさっと炒め、調味料を加えて手早くからませる」の意味のほか、書面語では“烹茶”で「茶を沸かす、茶を入れる」の意味で用いられる。『金瓶梅詞話』では、茶を抽出する動作を表す用例が 4 例見られる。2 例は、第 21 回、呉月娘が雪を集めて湯を沸かし、上等の茶を家族たちにふるまうときに用いられる。うち 1 例はこの回のタイトルの一部である。
31)吳月娘掃雪**烹**茶。 (21/1a-3)
（呉月娘が雪を掃き、茶を沸かした。）
32)教小玉拿著茶罐，親自掃雪，**烹**江南鳳團雀舌牙茶[23]，與眾人吃。(21/9a-11)
（小玉に甕を持たせ、彼女［呉月娘］自身は雪を掃いて取って、江南の鳳団雀舌という有名な茶を沸かして皆に飲ませた。）
高級な茶に合わせてほかの部分では使われない書面語的な動詞を使い、特別な場面であることを演出したのではないだろうか。[24]
後の 2 例は、四字句の連続の中に見られ、先の“煮”と状況が似ている。
33)火邊茶**烹**玉蕊,卓上香裊金猊。(72/16a-2)
（火の傍では玉蕊の茶が沸き、机の上では獅子の香炉から煙がゆらゆらと出ている。）
34)酒汎金波,茶**烹**玉蕊。(78/9a-8)
（酒は金波を泛べ、茶は玉蕊を煮る。）

5. 小結

本稿では、「茶の抽出」を表す動詞を例に、『金瓶梅詞話』という同一の作品の内部で観察される言語の通時的変化を報告した。調査の結果、“點”が減り、“頓”が増えたほか、“點”の運用の変化（付加成分を伴い具体的な「事件」を表す＞抽象的な「活動」を表す方向へ）があることがわかった。一方、用例は少ないが、“泡”、“燒”は、補作部分とその他の部分の言語を分ける指標の一つと言えるだろう。その後の崇禎本の編者も、少なくとも“泡”には抵抗を

---

[22] 龍團：北宋時代、帝室用に龍や鳳凰の模(かた)にいれて作った茶を龍団鳳餅茶と呼んでいた。ここでは上等な茶を表現しているだけかもしれない。
[23] 鳳團雀舌牙茶：“鳳團”は注 22 を参照。布目 1989:210 には「採んだ茶の最高のものを小芽という。雀舌・鷹爪ともいう」とある。小野忍・千田九一訳『金瓶梅』（平凡社、1972 年）上巻 p.250 では「ここではそういう茶を飲んだという意味ではなく、茶の美称」と注釈している。
[24] 大野広之氏のご教示による。

感じなかった。以後、“泡”の現代に続く発展を裏付けるように、『儒林外史』、『岐路灯』、『紅楼夢』で“茶”を目的語に取る用例が見られる。一方“煮”、“烹”は文言的で用例が限られている。

〈使用テキスト〉

詞話本：『新刻金瓶梅詞話』大安,1963 年。（影印本）
劉本棟・校注、繆天華校閲『金瓶梅』（上・下）（第三版）三民書局,2007 年（初版は 1980 年）。

崇禎本：『新刻繡像批評金瓶梅』（会校本）斉魯書社,2011 年。
『新刻繡像批評金瓶梅』（影印本）線装書局,2012 年。（天津図書館蔵本の影印）

〈参照文献〉

【日本語】（日本語読み、五十音順）

荒木典子 2005.「“VO 在 L”の動詞賓語と数量詞—『金瓶梅詞話』と現代漢語の対比を中心に—」,『中国文学研究』, 第 31 期:242-254。

荒木典子 2007.「『金瓶梅詞話』における疑問副詞“可”」,『中国語学』, 第 254 号:181-198。

伊原大策 1994.「《金瓶梅》における言語の同質性と異質性」,『筑波大学言語文化論集』, 第 38 号:185-196。

木村英樹 2014.「“指称”の機能—概念、実体および有標化の観点から—」,『中国語学』, 第 261 号:64-83。

地蔵堂貞二 1993.「《金瓶梅》の言語—その分布について」,『中国語研究』, 第 35 号:81-91。

布目潮渢 1989.『緑芽十片　歴史にみる中国の喫茶文化』, 岩波書店。

【中国語】（日本語読み、五十音順）

王東明,呉細卯,呉小芹 2009.「宋元明清時代中国茶文化発展過程的研究」,『黄岡職業技術学院学報』,第 3 期:21-23。

郭孟良 2002.「《金瓶梅》与明代的飲茶風尚」,『明清小説研究』,第 2 期:128-136。

朱徳熙 1985.「漢語方言里的両種反復問句」,『中国語文』,第 1 期:10-20。

沈家煊 1995.「有界与無界」,『中国語文』,第 5 期:367-380。

石毓智,李訥 2004.『漢語語法化的歴程—形態句法発展的動因和機制』,北京大学出版社。

陳偉明 1998.「雑談《金瓶梅》与明代茶文化」,『農業考古』,第 2 期:42-68。

陳平 1987.「釋漢語中与名詞性成分相関的四組概念」,『中国語文』第 2 期:81-92。

潘承玉 1999.『金瓶梅新証』,黄山書屋。

李佳瑜 2021.「《金瓶梅詞話》中的飲茶習俗」,『書屋』第 8 期:86-88。

劉学忠 1999.「試論《儒林外史》与明清茶文化」,『古籍研究』,第 3 期:73-132。

劉学忠 2002.「論《金瓶梅》与中国茶文化」,『阜陽師範学院学報（社会科学版）』, 第 6 期:36-40。

（『雲漢』1 号, 2023 年 3 月 26 日）